

「光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ 1:5)。この御言葉に聞き入りながら、ふと、思い巡らすことは、千年前と言わないまでも百年前の人々が、この言葉を聞かされた時の感動と、現代を生きる私たちがこの言葉を聞かされた時の感動は、果して同じものなのだろうか、ということなのです。奇妙なことを考えるとと思われる方もおられるかも知れません。しかし、率直に言って昔の人々の方が、よほど切実に新鮮にこの御言葉に聞き入っていたのではないのでしょうか。なぜかと言えば、私たちが生きるこの時代には、夜も昼と変わることはない光が満ち溢れ、夜の闇がどこかに追放されてしまったように思われるからです。

数年前のクリスマスの季節に、私は『クリスマスの思い出一冬の炉端で』というドイツの女流作家が、自分の幼い頃に経験した様々なクリスマスの思い出を郷愁と感動を込めて綴った随想集を読みました。ランタンを手に、雪道をかき分け、寒さに震えながら集った村の教会のクリスマス、そして懐かしい様々なクリスマスの習慣、それらを厳しい自然の移ろいと共に心暖まる筆致で認めたものでした。その本の中に次のような一節がありました。

「私の育った頃はもう電気の時代でした。とはいえ、両親や祖父母、ことに一生を貧しく暮らした子守の老女などは、電気は節約するものと心得ておりました。そのお陰で私は、たそがれ時の屋内のあの心和む居心地の良さを覚えることができたのでした。台所には大きなタイル張りの炉があり、日がな一日、チロチロと火が燃えておりました。灯ともし頃ともなると、子守は炉の扉を開け、赤々と燃える薪の照り返しに明りを求めるのを常としていました。」

私たちは自由に気ままに、遠慮会釈無しに電気を使っています。けれども、そんなことができるようになったのは、長い人間の歴史の歩みのなかでも、たかだかこの 50 年、60 年のことでしかありません。私の 95 才になる母が小学生の頃に委ねられた仕事が、納屋のランプ磨きだったそうです。それは多分、文明先進地と呼ばれるヨーロッパやアメリカでも同じ事でしょう。つまり、レンブラントやジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールの描いた世界がそのまま残っていたのです。もっと具体的に言えば蠟燭一本の光、油を燃やすランタンの光、それがそのまま夕闇とともに何処の家でも用いられた生活の光、そのものだったのです。「灯ともし頃ともなると、子守は炉の扉を開け、赤々と燃える薪の照り返しに明りを求めるのを常としていました」と書かれてある通りです。現代の私たちは、とっくにこのようにチロチロとももる、静かな温もりのある灯火を喜ぶことを忘れてしまっています。

確かなことは「人間が生み出す光で暗闇は覆われている」ということではないでしょうか。少なくとも日本人が日本の社会で生きる限り、飢えや失業の故に生死の境をさまようということはありません。様々な欲望を刺激し続ける情報が行き交い、とりわけクリスマスの季節になると、あくまで華やかに、きれいに演出された人間の生み出す光が、まことの光の到来を見えにくくさえしているのです。一見、暗闇は人間の生み出す光に覆われています。しかし、そのような現実の中で、むしろ人間の闇の力は着実に大きくなっているとさえ思えます。誰の心にも、一人よがりの我がままな自分だけがよければいいのだという思いがひしめき、分かち合うこと、愛し合うことが、片隅に追いやられていることはないのでしょうか。そんな私たちに向かって、ヨハネは告げています。「光は暗闇の中で輝いている」と。すでに光は暗闇の中に輝いているのです。わたしたちのもとに来ています。そのまことの光、御子イエスを自らの心の闇に迎え入れるクリスマスとしたいと思います。